



## 人は動物と話せるか

小松 守

(秋田市大森山動物園 園長)

小さな子どもの質問に的確に答えることは中々骨の折れるものだ。

「虫にはたくさん足があるのに、ライオンとかキリンの足はどうして4本しかないの」とか、「動物の子どもが卵で生まれたり、赤ちゃんで生まれたりするのはなぜ」など、鋭い質問が多い。子どもにも理解できるように、しかし、ごまかさずに、ある種論理的にちゃんと答えようとすれば、様々な専門的知識を総動員しなければならない。

先日、動物園に一本の電話があった。電話の主は小さな子を持つ親御さん。「子どもに『人は動物とお話できるの?』と問われ、動物園で動物のお世話をする飼育員さんは、動物とお話できているんですね?」どこか真剣さを感じた。

子どもの質問が鋭いのは、どこか大人が失い、忘れかけている本質、大事な部分に素直に迫っているからであろう。

電話の背景を勝手に想像してみた。子どもは、親の愛情をたっぷりもらい、やさしく語り掛けてもらい、それに対し子どもは親にいろいろお話を返したりする経験を持っている。それを動物のお世話をする飼育員と動物に重ね合わせているのかもしれない。

動物の飼育は、動物の気持ちをどこか理解できているからできるのだ。だから子どもは飼育員さんが動物とお話できるのだろうと思うのかもしれない。ある意味正しい捉え方だ。

子どもには「話せるよ」と答えることにしている。正確には「動物のことをわかってあげる努力をしているんだよ」となるだろうが、子どもにはストレートな表現がいい。

映画に登場するドリトル先生のようにはいかないが、人は動物とどこか心を通じ合わせ、動物と話することができると思います。動物に寄り添い、語り掛ける飼育員さんは、いつもそばにいて世話してくれる信頼と安心のできる人だから、動物もどこか心を許してくれる。飼育員さんも動物と良い関係性が作られるから、安心して動物の世話ができるのだ。

話す行為をきちんと考えようとするすると実に難解だから、ここでは単純に、欲求や感情などを伝えるためとしておきたい。高度な知能を持った人の思いや感情は、動物と比較できない複雑なものだから、人と動物が話すことなど大人は有り得ないと考えてしまう。

また、話すことは、思いや感情を意味のある音声信号である言葉として発し、共通認識の下で相手は受け取り理解し成立させている。だから言葉を持たない動物と人が話すことは、有り得ない。言葉は人がつくった特異な文化だからだ。

動物園でのゾウ飼育例では飼育員が幾つかの決まった言葉の号令でゾウの調教や馴致<sup>じゅんち</sup>を行っている。例えば右旋回させる時、ジェスチャーを交えて「右、右」と号令を出すとゾウは右に旋回する。この号令は音認知だけで、言葉理解

ではないように思うが、突き詰めた正解は言語理解の学問領域に入りそうで敬遠したい。

だが、動物と接し言葉を発しているうちに、どこか心が通じ合えた気分になることはときどき経験する。犬や猫を飼っている人、家畜と関わる人、そして動物園で飼育をする人、動物から何かしらの反応が返って来るような気分になることがあるのではないだろうか。

人は言葉できめ細かな心のやり取りをするが、動物にも共通する感情や情動、怒り、驚き、安心、不安、苦しさ、満足感などは、言葉でなくとも感じ伝え合える領域でもあるし、むしろ言葉が邪魔をすることだってある。

動物の種によって様々だが、動物のなきごえ、行動や態度、目や耳、顔全体や口元の表情、体毛の表情変化など、動物をよく見るとそれなりの繊細な感情を感じとることができる。人が動物に語りかけ、様々な反応があった時に人の思いや言葉に動物は反応し、時に理解しているんだな、と思うことがしばしばある。

もう60年近く前のこと、私が幼かった頃にラッキーと名づけられた家で飼っていた犬がどこかで猫イラズ（殺鼠剤の一種で昔はあちこちに置かれていた時代だった）でも誤食したのか、血反吐を吐き苦しむ死んだ時のことだ。

弱っていく姿に幼い私は、悲しく寂しい気持ちになりながらも、ラッキーの背中をやさしく撫で、話しかけ続け、懸命に看護したことがあった。衰弱しながらも時折目を開け、さすってくれて気持ちいいよ、有難うとでも言いたげに私を見てくれた。あの時の光景、やさしいラッキーの目を今でも思い出す。どこかで心が通じ合っていたと信じている。

野生の本性を忘れず、人に心を許したगरana

い動物園の動物だって、餌や様々な欲求を満たしてくれる飼育員さんとの関係は、時間とともに甘えや安心感を示したり、信頼し会話ができるよう変化してゆく。

村上春樹の短編小説『象の消滅』に人がゾウと会話する一コマがあるが、氏が米国の大学で日本人は動物と話のできる特異な性格を持つ人々だと講義したところ、学生たちは言葉を理解しない動物と人が話すことはナンセンスだと反論したそうだ。

狸を和尚さんに、傷を負った鶴を美しい妻に変身させる日本人は、動物を人と区別せず、互いに話のできる同格と意識し、心が通じ合える存在として扱ってきた。日本人特有のやさしさか。労せず動物診療ができる功利的で、人間中心的な発想の「do a little ドゥ・ア・リトル」を意味する、ドリトル先生がする動物との会話とはどこか異なる。

人と動物の会話は、観念的、情緒的であり、合理的でも科学的でもないかもしれないが、動物という自分と同じいのちと向き合い、自身と重ね意識した時、自然に話しかけてみたくなり、相手への関心は高まる。そこから思いやる気持ち、いたわり、やさしさが芽生えてくる。人という動物は、そうした生き物のはずだ。

昨今は人間関係、社会や国同士もどこかギスギスしはじめ不安や恐怖さえ感じる時代だ。子どもの質問、「人は動物と話せるの？」はどこか鋭い所をついているようにも思えてくる。

あきぎんオモリンの森、大森山動物園が掲げるテーマは「動物と語らう森」、動物との対話で人の内にあるやさしさの再発見につながれば嬉しい。